

ここまで三時間かかった。やはり新幹線にすればよかっただろうか？ 途中で何度か思った。それほど実家は遠かった。

俺は実家の敷地に車を乗り入れて、適当な所に停めた。エアコンを入れていても、じんわりと汗をかいていた。ここら辺は山合なので、都会ほどは暑くない。それでも三〇度は超えていると思う。

車を降りると、熱気が包み込んできた。荷物を持って、家へと続くスロープを歩いて行く。

無駄に広い庭には所々雑草が生えていた。姉の礼子^{れいこ}が手入れをしているようだが、それでも追い付かず、残っている草が生き生きと根付いていた。夏の日差しを浴びて、木々の葉っぱも輝いて見える。

玄関のガラリ戸を開けて、中に入ると少しは涼しさを感じた。気配を感じて礼子が走り出てきた。

「あ、洋ちゃん、お疲れさま。運転大変だったでしょう」

満面の笑みを浮かべて礼子は言った。俺が帰ってきたぐらいで大袈裟だと思ったが、遠くに住んでいてなかなか会えないこともあり、懐かしさが込み上げてきたようだった。盆と正月ぐらいしか会えないのに、今年の正月は妻の友美が風邪をひいてしまって、帰省することができなかったのだ。

「ああ、大したことはないよ。それより姉さんは大丈夫？ 体調はどう？」

「うん、元気だけが取り柄だから、このとおりびんぴんしてるわ」

礼子は力こぶを作るように腕を曲げて、弾んだ声で言った。

姉は今年で三十四歳になる。未だに独身で、一人で父の面倒を見ているのだ。母親は俺が高校のときに男を作って出て行った。それ以来、俺たちは三人で暮らしてきた。当時は母を恨んだものだが、今となってはその傷も癒えて、記憶は薄らいでいる。

俺は高校を卒業後、東京の大学に進学して、そのまま就職したのだ。五年前に妻の友美と結婚してからは、時々しか実家に顔を出せなくなっていた。その妻は今回仕事で一緒には来ていない。

礼子は実家を離れるわけにはいかずに、地元で仕事を探して、今は事務の仕事をしているそうだった。

「親父の具合はどうなの？」

居間の座卓の傍に腰を降ろして、俺は言った。縁側を開放しているので、いい風が入ってくる。

「うん、今のところ元気にしてるけどね。片方が動かないでしょ。自分でも辛いみたいだね」

「そっか……」

父は二年前に脳出血を患い、左半身が麻痺してしまった。自分一人では何もできない状態なのだ。そんな父を礼子は放っておけず、一人で面倒を見ていた。

「ほんとに申し訳ないな、姉さん一人に押し付けちゃって」

「そんなこと気にしなくていいのよ。あんたにはあんたの仕事があるんだし、友美さんもいるんだから、彼女を幸せにしてあげればいいの。お父さんのことは姉さんに任せて、あんたは友美さんと幸せになることだけを考えなさい」

いつも礼子はそう言ってくれるが、彼女も年ごろで、このままでいると行き遅れてしまう。俺はそれを危惧していた。礼子にだって結婚して幸せになる権利はあるのだ。

二年前に姉にも結婚の話があったのだが、そのときに運悪く父が脳出血で倒れてしまったのだ。そのとき礼子は自分から父の面倒を買って出てくれた。結婚相手には断りを入れて、礼子は泣く泣く結婚を諦めたという経緯があったのだ。

そのお陰で俺は仕事を辞めずに済み、今の地位まで出世できたのだった。礼子には感謝しかない。

「もう、いっそのこと施設に入れたら？ 親父のためにもその方がいいと思うよ」

「そうなんだけどね。なかなか入れる所がないのよ。どこも空きがなくて順番待ちの状態なの」

「そっか……」

「今、お茶淹れるわね」

礼子は空気を変えるようにそう言って台所に立った。父は今年七十五歳になる。昔はバリバリ仕事をして、俺なんかよりも遥かに稼いでいたのだが、あんな体になってしまってから元気をなくしてしまい、痛々しくて見ていられなかった。

俺はぼんやりと、台所でお茶の準備をしている礼子を見ていた。三十四歳の姉を見て俺はドキッとした。大人の色香が備わっているのだ。なんだか前回見たときよりも、綺麗になった気がする。いろんな苦労を一人で背負い込んで、オシャレをする暇もなく、ここまで来てしまった。

グレーのタンクトップに身を包み、その下には短パンのようなパンツを穿いている。脚は剥き出しだった。家の中なので楽な格好でいる。

化粧もせずに、すでに女を捨てた感があるが、それが逆に俺の気持ちをそそったのだ。姉の横顔を見て、そう思った。

髪はセミロングほどの長さだが、ウェーブをかけるでもなく、後ろで縛っているだけだった。父の面倒を^み看るのが精いっぱい、美容室に行く時間もないようだ。俺はそんな礼子が不憫に思えた。

冷えた麦茶とクッキーが俺の前に置かれた。そのお茶を一口すする。

「あんたの仕事はどうなの？ 順調にいったるの？」

「ああ、お陰さまで毎日忙しくしてるよ。部下にも頼られちゃってさ。収入もそれなりに安定してる。全部姉さんのお陰だよ」

「それはあんたが頑張ったからでしょ。よかったわ。今は幸せみたいで」

手放しでは喜べない現実が俺にはあったが、それは今は言えなかった。

